

研究課題別中間評価結果

1. 研究課題名：連想に基づく情報空間との対話技術

2. 研究代表者名：高野 明彦（国立情報学研究所 ソフトウェア研究系 教授）

3. 研究概要

情報空間において人間の創造性を高める新しい創造的相互作用の実現を目指して「連想の情報学」を追求している。関連情報の検索・分析・提示と、脳における記憶の連想的探索・無意識的想起を効果的に結びつけるため、文書空間や語彙空間における類似性に基づく連想検索システムを構築した。この連想検索技術で大規模な実データベースに適用して、Webcat Plus、文化遺産オンライン、新書マップという実用的な公開情報サービスを立ち上げて、技術の有効性を実証した。

4. 中間評価結果

4 - 1. 研究の進捗状況と今後の見込み

理論的な裏付け、基盤となるソフトウェアの充実と信頼性に基づいて連想的文書検索システムが実際に稼働し、実用レベルで使える状況になっている点で順調に進んでいると思われる。

研究の新たな展開として「新しい読書環境」が挙げられているが、これは魅力的なテーマであり、今後はその実現に向けた研究の進展を期待したい。

4 - 2. 研究成果の現状と今後の見込み

“Webcat plus”、“文化遺産オンライン”、“新書マップ”といった実用的なシステムを完成させ、公開で一般の利用に供していることは実用として評価でき、使いやすく興味深いシステムであるという点で高いレベルに達していると考えられる。研究成果が公開されることは望ましいことであるが、CREST 研究の成果であることを明示するよう要望したい。

すでに実用レベルの成果を出してしまっているので、この先新しい展開はよほど先見的アイデアがないと難しいと思われるが、今後更に便利な知識活用システムに向けた基盤技術が開発されることを期待したい。

4 - 3. 今後の研究に向けて

今後2年間の目標を明確に示し、研究の進め方をより具体的に検討して、その実現のための推進体制と研究計画を詳細に詰めてほしい。何をどこまで行えば研究が完成したといえるかを現時点で明らかにしておく必要がある。

また、成果の公表として論文や学会での発表にも積極的に取り組んでほしい。

4 - 4 . 戦略目標に向けての展望

連想技術を背景にした、コンピュータ支援の新しい「読書技術」の追求と構築は魅力のあるテーマである。新しい読書技術の事例をいくつか提示してほしい。それらが押しつけでない形で生活情報技術として受け入れられるようになれば理想的である。

4 - 5 . 総合的評価

これまでの研究で実用的な検索システムがいくつか完成し、連想検索の実用性や有効性を示すことができたことで、見方によっては当初の目標はほぼ達成したものとも考えられる。今後の研究でこれらの成果をさらに発展させ、電子的な情報空間の特徴を生かした「新しい読書環境」を具体的に提示することを期待したい。そのためには今後2年間の目標をより具体化して計画的に取り組む必要があると思われる。